

硬膜外麻酔については当院ブログでもご確認ください。
QRコードを読み取るとリンクします。

硬膜外麻酔を受ける方へ

硬膜外麻酔は、背中から針を刺して硬膜外腔という狭い空間に細いチューブ（カテーテル）を留置し、そこから痛み止め（局所麻酔薬、麻薬）を投与する鎮痛法です。硬膜外麻酔は無痛分娩や帝王切開での麻酔（術後鎮痛）として使用します。当院では事前にこの説明・同意書に基づき医師が説明し、その後理解・了承された方のみに硬膜外麻酔を行います。

なお緊急時は硬膜外麻酔を原則お受けできません。

その他 37 週未満の時、血小板が 10 万/ μ L 未満、発熱がある場合も硬膜外麻酔は行いません。

・利点；

多くの場合で効果的な鎮痛が得られるため、陣痛や術後の疼痛が緩和されます。

麻酔量は定められており、分娩が進行し痛みが強くなった頃から麻酔薬を投与し始めます。

赤ちゃんへの直接的な影響はほとんどありません。

・懸念点；

分娩が遅延する場合や児の回旋異常を認める場合は吸引分娩や鉗子分娩を行います。

最も注意しなければならないのは以下合併症です。

[稀に起こる硬膜外麻酔に関わる重大な合併症]

・局所麻酔中毒：麻酔薬が硬膜外腔の血管内に入り込むことで口のしびれや味覚異常、耳鳴りなどが起こり、重篤になると痙攣や不整脈などを起こします。

カテーテル挿入時に血液がひける場合は、再度処置を行います（何度も行うことはできません）。

・脊髄くも膜下麻酔：針やカテーテルが硬膜を破り、くも膜下腔まで達すると麻酔の効果が強くなり、下肢が動かなくなる、発声困難や呼吸障害などを起こします。

全脊髄くも膜下麻酔と判断した場合は無痛分娩および術後鎮痛は中止します。

・硬膜外血腫：処置の最中に血管を損傷すると血腫を形成する可能性があります。足のしびれなどを引き起こしますが、多くの場合は一時的で軽快していきます。一方、手術による血腫除去などを必要とすることがあります。

・感染：清潔操作には注意して行いますが、細菌が入り込んだ場合は脊髄周囲に感染を起こすことがあります。

その他、上記以外にも意図せず合併症が起こることがあります。また顕著な体重増加による体格や、処置時に体位保持が困難な場合は硬膜外麻酔が難しいと判断する場合もあります。



これらの合併症を予防するために事前に各種の検査を行い、当日は専用の器具を用いて確立した手順で硬膜外麻酔を行います。

局所麻酔薬の量を減らすため、麻薬を添加する事があります。その際は『麻薬管理料』として別途 10,000 円(非課税)の追加請求をさせていただきます。

合併症を疑う時は再度処置または処置の中止を、万が一の重大な合併症が起こった時には適宜必要な処置を行います。

説明・同意書

上記の内容につき説明しました。

年 月 日

説明医師：

印

*** 本用紙は次回の 37 週健診でご持参ください。**

にしじまクリニック 院長 様

私たちは上記について理解しました。

そのうえで処置を受けることに同意します。

また必要と判断された追加処置や変更および中止にも同意します。

令和____年____月____日

妊婦患者本人 署名_____

配偶者 署名_____ 緊急連絡先_____ - _____ - _____

親族(続柄:____)署名_____ 緊急連絡先_____ - _____ - _____

* 処置を受ける本人と配偶者が同じ戸籍にない場合、本人の親族による署名が必要です。

2025 年 10 月 21 日改定